

タ リ タ ・ ク ム

第19号

# “Talitha, koum”

「少女よ、私はあなたに言う。起きなさい」(マルコ5:41)

日本聖公会 正義と平和委員会・ジェンダープロジェクト

2012年10月25日

〒162-0805

東京都新宿区矢来町65

日本聖公会管区事務所気付

正義と平和委員会

・ジェンダープロジェクト

TEL03-5228-3171

発行責任者: 大岡左代子

## “もっと自然な姿へ”

正義と平和委員会委員長 主教 ペテロ 渋澤一郎

去る9月14日～17日、「2012年日本聖公会宣教協議会」が静岡県浜松市「カリアック」で開催されました。最後の日のグループ討議の発表の折、あることがきっかけで一人の司祭が、自分が性同一性障害であることをカムアウトしました。その司祭のことを知っている人たちにとっては特に驚くことはなかったのですが、初めて耳にした人たちには少し衝撃的であったかもしれません。

その時、その司祭は女性とか男性という性の違いによって人を見ないでほしい、その人自身を見てほしいと訴えました。日本聖公会の中でも正義と平和・ジェンダープロジェクトなどの働きによって、かなり女性男性のくくりを超えていろいろなことが行なわれるようになって来てはいますが、日本聖公会総会や教区会における女性・男性の比率を見ますとまだまだ女性の比率は圧倒的に少ないのが現実です。いままでにも意思決定機関に出来るだけ女性の参加をと呼び掛けられていたがなかなか実現していません。ちなみに、この5月の総会の聖職・信徒代議員44名中、女性の方は6名でした。教会委員に関して言いますと、わたしの経験を振り返って見て、

ある教会では年によっては3分の2以上が女性の教会委員ということも珍しくなかったように記憶しています。だからどうだという声は聞いたことがありません。にもかかわらず、教区会や総会となりますと教会委員のようにはならないのが現状です。

今回の宣教協議会の「日本聖公会<宣教・牧会の十年>の提言」の一つに、「この世に仕える豊かな共同体形成<sup>1</sup>のためには、教区・管区的意思決定機関への30%以上の女性の参画を推進します」という内容があります。30%以上ではなく50%以上という意見もありましたが、一応30%に落ち着きました。“今は豊かではないのか”という意見もあったように記憶していますが、もちろん、豊かだとは思いますが、数の上でも男女に差がなくなるということは真の意味での豊かさを示すことになるのではないのでしょうか。数的には女性のほうが圧倒的に多いにも拘わらず様々な協議・決定機関に女性の参加が

<sup>1</sup> 提言の決定稿では「豊かな共同体」ではなく「この世に仕える教会」と表現されました。これは、協議会最終日での文言です。

少ないというのは、やはり自然ではないように思えるのです。

かつて、保育園の園長をしていたとき、市の保育園連盟の会議に出席したことがあります。私公の保育園が一つになっている団体です。市の保育所の園長はすべて女性です。私立保育園の園長は男女半々くらいだったでしょうか。その時の会議に出席した男性はたまたまわたし一人でした。40人以上いた園長の中でたった一人の男性でしたが、他の園長先生たちとはそれまでの集まり等で一緒にいましたので全然知らないわけではなく、個人的には違和感はそれほどありませんでしたが、しかし、それでも少し不自然な感じを受けたことは事実でした。そして、こういう感じを多くの女性の皆さんは感じておられるのだなあと改めて実感しました。総会でも何十人の男性の中に女性の議員が数名となりますとやはり威圧感とか違和感とか、不自然さを感じておられるに違いありません。

昨年、新聞で面白い記事を読みました。トルコでのサッカーの試合のことです。トルコのあるサッカーチームが八百長やファンの暴徒化などの不祥事が続いたため、サッカー協会はそのチームの試合を無観客で行なおうとしたそうです。しかし、直前になって、女性と子どもだけを無料で招待する案を思いついたそうです。その結果、競技場は4万人を超える女性と12歳以下の子どもたちで埋まり、

両チームには観客席から花束が投げ込まれ、相手チームはいつものブーイングではなく拍懐したとのこと。トルコ・サッカー協会は「(サッカーの)信頼と人気回復のため、招待を制度化することを検討する」とも言っているそうです。

教会の男性は暴徒(?)ではありませんので、会議は男性を排除して女性だけでやりましようと言うつもりはありません。女性のほうが男性よりも平和的であると言いたいわけでもありません。その試合も、本当はみんなが入り混じって平和的に観戦・応援できるのが理想だったのです。しかし、その試合が大変、平和的・友好的であったということもまた事実ではあります。

時には、教区会や総会を全部女性議員や代議員で埋め尽くしたらさぞ壮観だろうと思います。そこで決めたことを各教区や管区が実際に行なうということになったらどうなるのでしょうか。大混乱が起こるのでしょうか。女性だけで決めたことには従えないという人が出てくるのでしょうか。でもよく考えてみると、現在は逆の意味でそういうことが行なわれているのです。

しかし、もちろん、本当は女性、男性、あるいは冒頭に述べた司祭のような人たちも、それぞれ入り混じっているいろいろなことを共有できれば、それが一番自然な姿なのです。皆さんはどうお考えでしょうか。

## 宣教協議会に参加して

松原恵美子 (大阪教区)

9月14日～17日に浜名湖の「カリアック」で開かれた宣教協議会に、大阪教区から「女性の立場を代表する」という指名を受け、参加いたしました。

参加者(約140人)の多くは男性で、女性の参加は約2割。その数の不均衡さに驚きました。ある方(男性)は、「自分の教会は圧倒的に女性が多いので、聖歌を歌ったときに男性の



声が大きいののでびっくりした。」ともおっしゃっていました。今回の集まりではグループ協議を大事にするということで15のグループに分かれましたが、グループリーダー15人は男性でした。参加者の女性たちが「リーダーは男性ばかりですね。」ということ自分のグループで発言したところ、「言われればそうですね。」「気が付かなかった。」という反応がありました。また実行委員長から実行委員会の考え方としてグループリーダーを男性にしたことに対して、女性の参加が少ないので女性にはグループの中で発言をしていただきたかったのでリーダーに選ばなかったとの応答がありました。各グループからの中間報告のときも、1班だけ記録担当の女性が報告をしたグループがありましたが、それ以外は男性が前に出ることが多く、そのような中でドラフトコミッティにジェンダープロジェクトのメンバーを含め3名の女性が入っていたことは、心強く感じました。

さて、プログラムなどに関しては各教区などから報告が出てくることになるかと思えますので、ここでは夜な夜なロビーで集まっていた女子会についてふれます。どうも夜毎、グループごとに集まっていたようで、青年たちはラウンジやカラオケに集い、男性たちもラウンジに集っていたようですが、私たち女子(?)はロビーを陣取りガールズトークを繰り広げていたのでありました。と言っても恋バナではなく、女性の司祭の現状を聞いた

り、ガイドライン<sup>2</sup>の問題を考えたり、グループ協議の情報交換をしたりということでしたが、究極はどうすれば女性たちが思いを共有でき、繋がり、励ましあえるか、ということに尽きたのではないかと思います。この女子会の成果は、意思決定機関への女性の参画や、ハラスメント防止への意識、女性の司祭がこれからもっと誕生していくために何が必要か、ということ、それぞれのグループで発言することに繋がったのではないかと思います。グループによって、男女比にばらつきがあり、ぼつぼつとしかれない点ではなかなか発言が影響を与えることは難しいのですが、夜の女子会によって点がつながって線になっていったのではないのでしょうか。この線が各教区などにも生かされ、意思決定機関への女性の参画の推進などにつながってほしいと思います。そのためにもここでの出会いを大切にしていきたいと思いました。残念だったのは女子会に20代の若い世代を呼びこめなかったことです。どうしたら若い世代の人たちと課題を共有できるか、これは大きな課題かと思えます。それともう1つ、ふれておきたいことがあります。グループからの中間報告の中で、女性の司祭やセクシュアルマイノリティーの立場の人が傷つく発言があり、そのことに対し



<sup>2</sup> 「女性司祭の実現に伴うガイドライン」  
1998年第51(定期)総会決議

てフロアから問題提起がされました。もちろんその方は、傷つけようとして発言されたわけではありませんでしたが、後にそのグループからの発言に至った経過説明と謝罪、実行委員会からの謝罪が行われました。このような出来事があったことはとても残念でしたが、同時に、言葉によって人を傷つけてしまうことは、自分も含め誰にでもおこりうることだということにあらためて気づかされました。私自身日頃から様々な立場の人の痛み、苦しみを想像する力を高めていくことが大切だと感じました。また「出会う前に嫌いというのではなく、まず出会ってほしい」とい

う声があり、そのことは参加者全員が重く受け止めたことと思います。

この後、「日本聖公会<宣教・牧会の10年>の提言」が出ますが、10年後、ジェンダーに関する課題がどこまで実現されていくのか…この10年をムダにしないためにも、ガイドラインなどの課題に早急に取り組んでいかなければいけないと感じました。1995年の宣教協議会の課題から女性の司祭の誕生が実現したように、ジェンダーの取り組む課題から、これが実現しましたと言える10年後であってほしいと願います。

## 2102年日本聖公会宣教協議会の成果

～日本聖公会<宣教・牧会の十年>提言より～

大岡左代子（京都教区）

去る9月に行われた2012年日本聖公会宣教協議会は、すべての教区主教、各教区代表、管区諸委員会、大韓聖公会からの代表など140余名が集い、これまでの宣教課題はもとより、東日本大震災、福島第一原子力発電所の災害によってもたらされた私たちのこれまでの生き方や教会のありように対する問いについて、さまざまな話し合いが行われました。

私はこの集まりに、正義と平和委員会・ジェンダープロジェクトの代表として参加させていただきました。

テーマは「いのち、尊厳限りないもの—宣教する共同体のありようをもとめて」。1日目は「イエスの道を歩く～未踏へのチャレンジ・未来の子どもたちのために原発を止めるためには～」と題してベリス・メルセス宣教修道女会の清水靖子シスターから深刻な問題提起を受け、キリスト者として現実はどう向き合うのか、大変きびしい選択を迫られていることを感じました。そのことは、清水シスターに続く、東北教区の長谷川司祭、越山司祭の現場からの声においても同様に感じ、神の被造物としての人間の責任・使命とは何かを深く考えさせられるものでした。翌日には、西原廉太司祭から「わたしたちの『宣教』を思い描くために～日本聖公会の宣教の課題と可能性」という講演を聞き、宣教とは何かを問い直す多くの示唆を与えられました。創世記1～2章をテーマとする笹森田鶴司祭のバイブルシェアリング「わたしたちは何者で、何をすべき存在であるのか～神との関わりの中で問いかけに答える～」は、これまでのことを包含したとてつもなく大きな課題であることに気づかされたように感じました。そして、参加者は、15のグループに分かれ、これらの内容を基礎としてこれからの日本聖公会の宣教について、ある時には熱く、ある時にはかなり疲れながら何回も、何時間も話しあいました。そして、各グループからでき

た声を最終的にまとめあげたものが日本聖公会<宣教・牧会の十年>提言として完成されました。その趣旨は、「わたしたち日本聖公会の宣教の原点は、教会内の牧会はもちろん、教会のある地域全体に対する牧会的働きをていねいに実践していくこと、その地域にある課題、そしてこの世界にある課題に誠実に取り組むことにある」というもので、それはとりもなおさず、丁寧に誠実に聖職も信徒も牧会の働きを担っていこう、ということだったのではないかと思います。提言には、そのための具体的な課題、とりくみ、決意が教会の5つの要素と言われている視点から提案されています。ここでは、そのすべてを紹介できませんが、ジェンダーに関わることのみを紹介させていただきます。

**◇一人ひとりが宣教の担い手として、対等なパートナーシップのもとに協働していくため、ジェンダーの平等を保障し、いかなるハラスメントも起こさない共同体を築きます。**

今回は、女性の参加者が少なく、またプレ・宣教協議会でもジェンダーの視点からの分科会は設定されなかったため、正直なところどのようにジェンダーの課題をいれることができるのか、と不安をもって参加しました。一方で、毎夜のロビーでは、自発的にあつまった女性たちが、各地の女性やジェンダーに関わる課題が分かち合い、それらは宣教・牧会の場での大切な問題であることが共有化されていったことは大きなことでした。一方、前述されたような全体会での出来事もあり、ジェンダーの平等に対する認識や共同体として一人ひとりの尊厳を大切にする、という機運が高まったようにも感じます。この文言は、「主にある交わり、共同体となること<コイノニア>」という項目にあります。私たちの教会が真に神さまから祝福された共同体となるためには不可欠な問題だと思えます。

**◇この世に仕える教会の形成のためには、様々な立場の人びとが、教会・教区・管区的意思決定機関へ平等に参画することが求められます。その一歩として、女性の比率が高まるように働きかけ、2022年までに少なくとも30%の参画を実現し、さらに青年層の参画も推進します。**

2002年の総会で、意思決定機関への女性の参画を推進するために、総会代議員の選挙方法の一部を4年間に限り変更する、という議案が出されたことがあります。否決され努力目標として各教区で取り組んでいくということになった、という記憶があります。その後、さて、意思決定機関への女性の参画は進んだでしょうか？今回も、フロアからは、「数値化は無理！」という声があがりました。逆に「数値化することで目標が低くされたり、30%が達成されたらそれでいい、とならないだろうか？さらなる参画を促すには足枷にならないか？」という積極的な否定？の声もありました。また、50%やどちらかの性が40%をくだらないように、という意見もありましたが、現在ACCが承認している目標値30%を掲げることとなりました。

こういう議論をする時には、必ず「女性の数だけが増えても意味がない」とか「発言しなければ意味がない」という風に言われます。そのことは確かに一理あると思います。しかし、全信徒の60%以上が女性である現状の中で、大切なことを決める意思決定機関を占めているのは圧倒的に男性である、という現実はいかに不公正ではないでしょうか？一方で、女性の代表者が誰の声を代表するのか、ということも非常に重要なことがらです。これまで男性中心であった教会

の構造が、女性が増えることによってどのように変えられるのか、それは女性が、どこに立ち、誰の声を代表するかという問題でもあると思います。同時に女性、男性という二分法ではなく、私たちは選ばれた人に誰の声を代表してほしいのか？ということにも関わるとも思います。これから、各教会で、各教区でさまざまなアクションが起きることを祈りたいと思います。

## 「性と人権・キリスト者全国連絡会議 2012」

(107~8 於 日本聖公会京都教区センター) に参加して

女性デスク 木川田道子

前号の「タリタ・クム」でも紹介した標記の会に参加してきた。あまりにも多くの事柄を内包するこの集まりの全容をまだ私の中で整理できずにいるので、ここでは、会議の概要と、参加して考えたことから2、3の事柄についてだけ書いてみたい。

今回の会議は、エキキュメンカルな活動に関わってきた人たちが中心になって、日本の教会と社会の中で、性暴力や性差別が起こっている現状を共有し、今後に向けた連帯について考えよう、と2年の準備期間を経て呼びかけられたものである。当日は、呼びかけ人らの予想を上回る70人も参加者が全国から集まった。各教団・教派で、また個人・グループで性差別や性暴力の問題に取り組んでいる人、中には、フェイスブックつながりで当日駆けつけた人もおられた。「段差のある、障がい者用トイレのない会場だと知っていたけど来ました。」と言う車いすの方（聖公会の建物として、これは何とかできないものか、とこの時は切実に思った）、「自分はノンキリスト者だけ参加したいと思って・・・」いう方も何人かおられた。会場には、性差別や性暴力、DV防止、性と生殖に関する権利などについて活動している教会関連や市民グループの機関紙、出版物、DVDなどの販売物、パンフレットなどが並べられた。実に多様な人たちがこの場に集まってきていることにまず驚いた。

一日目の始まりに、呼びかけ人らが「すったもんだして」まとめられたという基調報告を読んだ。—キリスト教会において性と人権を巡って困難を極めている状況が続いている。聖書を根拠とした性差別や排除、聖職者による性暴力、「家族主義」の押し付け等々。それを考えるには、さまざまな意味で閉そく状況にある今の日本の社会のただ中に教会が在ることと相まって、キリスト教が持ってきた構造的な体質や聖書理解を問うていく必要がある。その一方で、それを問う私たち自身も、それぞれが異なる文脈の中で生きており、関心のあるところも、問題意識のレベルも違う。自分にはOKな事柄でも、別の人には理解しがたいことがあり、そのことが衝突を生むこともあるかも知れない。自分たちは被害者にも加害者にもなり得る。そんな私たちが、異なりは異なりとして、他者の痛み、悲しみを共有しつつ、今後どのようにつながり、協働していけるのか—そんな内容だと私は理解した。（呼びかけ人らの一番言いたかったこととは必ずしも一致していないかも知れないこともお断りしておく）それに続く自己紹介と翌日の協議は、（ある参加者が「自分はいかにこれまで“均質”なところにいたことか。」と感想を洩らされていたが）まさに私たちそれぞれの「異なり」を認識する場だったと私も思う。

2日目午前、 「性と人権、今わたしたちの課題は」と題した4人の方による発題が行われた。

4人の発題の中では、性差別や人権の取り組みから思うこと、そもそも教会とは何か、そしてその教会が行う宣教の中身と人権との関係、日本の中の日さらにその中のキリスト者というマイノリティとしての現状と可能性、「結婚」をキーワードにした異性愛主義をめぐるキリスト教の課題、聖書が性暴力の加害者側になっていること、しかしその中でも女性たちが生命と希望に導く神を語っていたこと～などが話された。・・・ここだけでもきっと質疑応答に1年以上かかるだろう！

これらの発題を受けて、小グループで話す時間があり、私のグループでは、教会における結婚についての捉え方が話題に上がった。私たちはたぶん「結婚」自体や「結婚制度」に関して、それぞれ少しずつ異なる考えを持っていたと思うが、教会で祝福されるべき事柄はたくさんあるのにあまりにも「結婚」や「結婚式」が突出して奨励されているのではないか、という点では同じような思いを持ったように思う。

最終日程の、この会議の今後のあり方についての協議では、たとえば、私たちはどのような参加の仕方をすべきなのか、という問いかけもあった。「日本聖公会」「教団」などといった属性に寄って立つ組織からの発言では、結局これまでの組織構築と同じやり方ではないか、私たちはその中で分断されてきたのではなかったか？等。また、私たちは互いに話したい事柄も違うし、意識も違う。「異なり」を確認する細かい議論に分け入ることは大変なことだけれど、それをするとなしにつながっていくことはできるのだろうか。あるいは、私たちは「運動体」で行きたいのか、ゆるやかなネットワークで進みたいのか、本当の意味でのネットワークとはどうあるべきなのか。・・・そういった問いかけもなされたと思う。

最終的には、自分たちがどのようなつながりとして、これから教会や社会に対して意思表示していくのか、という具体的な話にまでは行き着かなかったが、とにかく、今後もこのような集まりが必要であることは確認できたと思う。私自身は、たとえばエキュメニカルなハラスメント相談窓口づくりや、起こった性暴力事件に対していち早く声を上げられるような体制づくりを思い描いて参加したが、参加してみて、結局「異なり」を持つ私たち一人ひとりが、互いの持っている言葉の意味、制度と自分との関係などを見つめて、他者のそれとを照らし合わせる作業を丁寧にやりながらでしか、その先は見えてこないのかも知れないと思えてきた。・・・しかしそれでは教会や世論に対して強い声を上げられるようなつながりは、いったいいつどのように実現できるのだろうか。ちょうどこの原稿を書いている時に、沖縄県で米兵による女性への性暴力事件がまた発覚した。私たちの怒りと憤りをどこにぶつけたらいいのだろう。私たちには連帯が必要だ。キリスト教に軸足を置きながら、ある事柄では、ノンキリスト者とかキリスト者などと言っていられない状況なのだ。焦る気持ちの一方で、私は、数年前に初めて参加したエキュメニカルな教会女性会議を思い起こしていた。何ものの縛りのない、平場の、対等な関係の中で、私は何ものにもならなくてもいい開放感を感じ、なぜ今の教会がそのような場所になっていないのかと疑問を持ったものだ。そして自分が体まるごとで受け入れられているような感覚の中で、**sisterhood**を実感できたという経験がある。その時の運営に関わられていた何人かの方が今回の呼びかけ人や運営を担ってくださっていたと思う。長い道のりだが、確実にその時のことが今に続いてきている。私たちが息長く希望を語り継いでいくことが次の動きに続くと思いたい。

最後になったが、一時は開催の断念も考えたという今回の会議を粘り強く準備してくれた呼びかけ人の方々や運営を担ってくださったキリスト教女性センターの皆さんに心から感謝したい。

## 2012年 第20回 聖公会「女性」フォーラム報告

### 「キリストと共に働き、この世界と教会を新たにするために」 ～「女性」フォーラムの20年をふり振り返りながら～

去る7月15日(日)～16日(月・祝)、東京教区聖マーガレット教会を会場に、第20回聖公会「女性」フォーラムが行われました。真夏の太陽の照りつける東京に約50名の参加者が集い、共に祈り、声を聴き、さまざまなことを分かち合いました。

今回のフォーラムは、1日目の礼拝、井戸端の分かち合いにはじまり、2日目は、女性フォーラムの歩みを北川規美子さん(大阪教区)が、「ジェンダープロジェクト10年の歩み」を大岡左代子(京都教区)が、そして2月下旬～3月上旬、ニューヨークで開かれた国連女性の地位委員会と国際聖公会女性ネットワークの会議に参加された田中あゆみさん(北関東教区)と西間木美恵子さん(東北教区)が、ニューヨークでの体験と福島の実状をそれぞれ20分程の持ち時間で報告をした後、わかちあいの時をもちました。いつものレギュラーメンバーの方、久しぶりに参加された方、初めて参加された方、それぞれに自分の目線で時間が足りないくらいお話をすることができました。

1992年に各地の有志の女性たちで始められた聖公会「女性」フォーラムは、20年の月日の間に女性の司祭実現の原動力となり、教会の中で声をあげにくい人々の癒しと力づけの場となり、多くの参加者のエンパワメントの場となってきた・・私自身はそんな印象もっています。第一回のテーマ「状況を分かち合う～そのむかし、

井戸端は女たちの情報交換や癒しの場であつた～」このことは、回を重ねる中で、最も大切にされてきた「女性」フォーラムの柱だったのでですね。とあらためて気づきました。いつまでも新米だと思っていた私も、初参加は1999年! といえば木川田道子さんと「牧師夫人のユーウツ」というコントを作って演じたのが始まりだったなあ、と懐かしく、またちょっぴりはずかしく思い出しました。普段は離れていても、フォーラムで出会うと不思議と「素」の自分で話すことができる安心の場所。決まった当番や役割もない集まりゆえに、次回はどこで、誰が引き受けるのか? と心配が起きるのだけれど、不思議と回を重ねていけるのは、主体的な集まりだからかもしれません。主体的な信仰の回復は、ジェンダープロジェクト発足当時の大きな目的でした。私たちの活動の源流はこの集まりにあつたのだなあ、ということにあらためて気づかされた二日間でした。

(大岡左代子・京都教区)

#### わたしの大切なもの

佐分利みどり(京都教区)

第20回聖公会女性フォーラムが、東京の聖マーガレット教会で、7月中旬の連休に開催されました。私自身は2006年の女性会議からの参加の新米ですが、この集まりを楽しみに、大切にしています。発足

10年を迎えるジェンダープロジェクトを生み出し、ニュースレター「タリタ・クム」の発行、2003年のプレ・聖公会女性会議、2006年の第一回聖公会女性会議を開催した源泉は、この女性フォーラムの井戸端会議なのかもしれません。ひと言でいえば、潔い女性たちの集まり。突き抜けた個性を持ち寄り、井戸端会議を方向づけしていく。そんなところに私は惹かれているのでしょう。沖縄・京都・東京・大阪・長野と開催地が代わり、日常から瞬間逃られるのも魅力です。

タリタ・クム。少女よ起きなさい。気づいて、動きなさい。来年は、京都教区周辺で開催が予定されていますが、開催地として奈良を提案しています。気軽に参加してみてください。内に秘めたものが、目を覚ますかもしれません。



## 大韓聖公会の「女性宣教主日」について

中部教区 司祭 フィデス 金善姫

**主はわたしに油を注ぎ主なる神の霊がわたしをとらえた。わたしを遣わして貧しい人に良い知らせを伝えさせるために。打ち砕かれた心を包み捕らわれ人には自由をつながれている人には解放を告知させるために。(イザ61:1)**

大韓聖公会は2008年から毎年9月第1主日を、21世紀に相応しい女性宣教の力量を拡大しようと、女性宣教主日として制定しました。宣教の初期から積極的に働きを担い、今日の大韓聖公会に大きな役割を担当してきた女性たちの働きを励ますこと、女性の活動の啓発、指導者の養成及び教育、賜物の啓発のための多様なプログラムを展開することを目的としている。女性宣教主日には、「女性宣教主日のための祈祷文」をささげ、主日の信施は特別献金として用いられます。

### 「女性宣教主日のための祈祷文」

大韓聖公会の女性宣教の活性化のためにお祈りしましょう。

神様は、初めに人類を創造され、男と女として分け隔てなく、お互いに協力し、世に仕える事を命じました。大韓聖公会の女性たちは宣教の初期から積極的に宣教の働きに参加し、今日の教会に大きな役割を担ってきました。信仰の先輩に習い、私たちが主の体である教会と世のために礎石としての使命を担うことができますように。

「大韓聖公会の女性宣教主日」が制定されましたことを感謝し、大韓聖公会の女性たちが多様な賜物の啓発と積極的な献身によって、世の希望となり、成長する教会と生まれ変わるように導いてください。アーメン

# お手軽な井戸端会議 ～女性たちのエンパワメント～

身と心と霊が共に祈るとき 歓びのしらせ響きわたる

2012年 12月 1日 (土) ①10:30～12:15 「すぐ役に立つ黙想へのお招き」  
②13:30～15:30 「思いつきクリスマスキャロル！」

2013年 1月19日 (土) ③10:30～12:15 「使徒マグダラのマリア?!」  
④13:30～15:30 「ちょっとディープな黙想体験」

\*開場は、各プログラムの30分前からです。

会 場：大阪教区 大阪聖パウロ教会 (大阪市北区茶屋町)

\*駐車場はありませんので、公共交通機関でお越し下さい。

最寄駅：JR「大阪」駅、阪急/阪神/大阪市営地下鉄御堂筋線「梅田」駅、谷町線「東梅田」駅、四ツ橋線「西梅田」駅

参加費：ワンコイン (500円)

申込み：不要です。当日、会場に直接おいで下さい。(各プログラム先着50名まで)

## ① すぐ役に立つ黙想へのお招き

黙想なんてやったことない!という方にぴったり。ゲーム感覚で身体や心を動かし、「内なる声」に耳を傾けるエクササイズ。肩の力を抜くにも練習は必要ですが、黙想は案外身近なもの。

余分な力を解き放つ方法は、普段の生活でも即生かせますね。

## ② 思いつきクリスマスキャロル！」

教会でもキャロルを歌いますが、聖歌集が新しくなったこともあって、知らない美しい歌もたくさんありますね。ひとつひとつの聖歌の背景をもっと知り一緒に繰り返し歌ってみると、なんだかとても身近になるもの。聖歌の歌詞を味わいながら、プロの伴奏に合わせてみんなで歌いまくりましょう。

## ③ 「使徒マグダラのマリア?!」

「12弟子は全員男なのだし、女の使徒なんていない」…本当にそうでしょうか? 聖書にそんな女性は登場しないと、長い間考 えられてきた歴史があると思いますが、本当にそうだったのか、

『マグダラのマリア、第一の使徒 —権威を求める闘い』の訳者である吉谷かおるさんのお話を伺います。

## ④ 「ちょっとディープな黙想体験」

生きていることが辛くなった時は、何をやっても無意味な気がして、どんなに美しい親切も感謝もただ負担に感じるだけという体験は、結構あると思います。これは心と霊が疲れているサイン。この時間は黙想によって元を取り戻したい人、もっとイエス様を心にお迎えしたい方々のために設けました。

他宗教、無宗教の方も歓迎です!特に準備は必要ありませんので、手ぶらでおいで下さい。

主催：日本聖公会 女性が教会を考える会有志

共催：日本聖公会女性デスク (女性に関する課題の担当者)、正義と平和委員会ジェンダープロジェクト

協力：大阪教区・神戸教区信徒有志/お問い合わせ：北川規美子 (電話：090-1899-0715)

<実際の内容は?>

### ① 「すぐ役に立つ黙想へのお招き」

黙想は何故、わたしたちに必要なのかという導入からはじめ、心だけでなく身体で祈る練習、歩いて祈る練習、身体力を抜く練習、自分で呼吸を整え身体力を抜く練習をいくつか一緒にやってみます。時間が許せば「レクチオ・ディヴィナ」も、自分に合ったリラックスの仕方をみつける時間です。  
◦ミニスカートやGパンなどは避けてください、動きやすいラクな服装が最適です。

### ② 「思いっきりクリスマスキャロル！」

知って楽しい聖歌の小ネタを紹介。続いてみんなで、パイプオルガンの伴奏に合わせて歌ってみます。

### ③ 「使徒マグダラのマリア?!」

最後までイエスに従い、復活の証人となったマグダラのマリアは、実はすぐれたリーダーでした。歴史に埋もれた女性たちの声を掘り起こし、その力強いメッセージを分かち合ってみませんか。  
※参考図書 アン・G・ブロック著『マグダラのマリア、第一の使徒 一権威を求める闘い』  
(吉谷かおる訳、新教出版社、2011年、3800円税 訳者謝辞あります。お問い合わせは090-8060-3735 吉谷まで)

### ④ 「ちょっとディープな黙想体験」

「初めての方」は歓迎ですが、やる気は必要です。呼吸法とリラックスの練習に続き、イメージを用いて祈る練習をいくつか試みます。「幸せの場所」へのトリップ。「感謝」の発見、他。  
◦ミニスカートやGパンなどは避けてください、動きやすいラクな服装が最適です。  
◦このプログラムは、遅刻/早退が出来ません。最初から最後までご参加下さいね。

<講師プロフィール>

プログラム①②④→上田 亜樹子 (うへだ あじゅこ)

1985年、聖公会神学院卒業。日本聖公会横浜教区で、伝道師として奉職した後渡米。1991年、Women's Theological Centerを卒業。女性刑務所、大学チャプレンなどの現場で奉仕職について学び、1994年、Episcopal Divinity Schoolを卒業。ハワイに渡り病院チャプレンインターン、アメリカ聖公会ハワイ教区聖マルコ教会教育主事、海辺の聖ヨハネ教会司祭などを経て、2003年に来日。以来2012年3月まで立教大学チャプレンを務めた。現在は関西にて充電中。

プログラム③→吉谷かおる (よしたに かおる)

1990年に北海道大学大学院文学研究科博士後期課程(宗教学)を退学。2001年から2008年まで、ノートルダム清心女子大学にて非常勤講師(キリスト教学)を勤める。2010年から現在まで、「日本聖公会管区女性の課題に関する担当者」神戸教区岡山聖オーガスチン教会信徒。

主な訳書としては、E・S・フィオレンツァ『知恵なる神の開かれた家』(共訳)他。

## ■ ■ ジェンダープロジェクトより ■ ■

第59総会期（2012年～2014年総会まで）ジェンダープロジェクトのメンバーです。  
よろしくをお願いします。（以下、五十音順にて簡単に紹介します）

大岡左代子（京都教区）：「いつまでやってるの～？」と声が聞こえてきそうです。いつまでやってもきりのない課題ですが、次期メンバーには名前を連ねていないように、新メンバーの発掘に努めます！

金善姫（中部教区司祭）：タリタ・クムの編集長ですが、いつもべ切間際にしか原稿をくれないメンバーに困っています。3期めに入りました。まだまだ夢いっぱい。 エネルギーたくわえて頑張るぞ！

小林聡（京都教区司祭）：ジェンダープロジェクト唯一の男性。青年委員長、原発に関するワーキンググループに、と大忙しですが、それぞれの課題をつなげる役割になれたらいいな、と思います。

小林玲子（中部教区）：女性会議に参加し、ジェンダーの課題に興味関心をもっていました。今期からメンバーに加わりました。何ができるか、みなさんといっしょに学びながら、やっていきたいです。よろしくをお願いします。

下条知加子（東京教区・聖職候補生）：いっしょに課題を分かち合おう、という甘い誘いによって今期からメンバーに加わりました。自分の時間を精一杯やりくりして参加できるようにしたいと思えます。よろしくをお願いします。

松原恵美子（大阪教区）：気がつけば最古参メンバーの一人です。女子中・高生と毎日出会いながら、ジェンダー課題の克服の大変さを実感しています。以前とは違う難しさもあるかもしれませんが、その経験を生かせたら、と思います。

※ 「コラム わたしの瞳に映る景色」は、今号はお休みさせていただきます。

### 女性とは？

ジェンダープロジェクトでは、「女性」とはあらゆる社会構造の中で、立場が弱くされている人たちの一つのグループであるという考え方をしています。性の多様化の中、「女性」という表現自体が問題視されることもあります。タリタ・クムで用いる「女性」という表現は、「女性」の視点を大切にしながらも、男女二分法にとどまった性別用語としてのみ理解されるより、包括的な意味で理解される事を意図しています。

### 正義と平和委員会

#### ジェンダープロジェクト

教会におけるジェンダー課題の共有と克服のために、すべての人が尊重されるネットワーク作りをめざして活動しています。機関紙としてのニュースレター「タリタ・クム」の発行(年3～4回)、学習会の開催、出前ワークショップの実施なども行っています。一人でも多くの人が、ジェンダーの課題に関心を持ってくださり、共に考えていける場をつくっていきたく願っています。

### タリタ・クムとは？

「少女よ、起きなさい」という意味のアラム語です。会堂長ヤイロの願いにこたえて出かけで行き、死にかかっている幼い娘の手をとって、イエスさまが言われた言葉です（マルコ5：41）。今までジェンダーのために十分に発揮することのできなかった女性たちのさまざまな潜在的能力や感性や行動力が、神さまの祝福によって主の栄光をあらわすために、より生き生きと用いられますようにという祈りと願いをこめて名付けました。